



対訳で楽しむ 『女の一生』¹

永田千奈

『脂肪の塊』 *Boule de suif* など短編小説で評価されてきた ギイ・ド・モーパッサン Guy de Maupassant (1850-1893) は、1883年、初めての長編小説、『*Une vie*』を雑誌『*Gil Blas*』に連載し始める。その後、刊行されたこの小説は大きな成功を収め、自然主義文学の代表作と呼ばれるまでになった。

さて、個人的なことを言うと、フランス文学専修の学生だった頃、私はこの小説が嫌いだった。とにかく、暗い。しかも、男女雇用機会均等法の施行により、女性管理職の誕生が騒がれていた1990年代、意気盛んな女子学生としては、夫や子供のせいで不幸になる女の話など、言語道断！という印象だったのである。ところが、40歳を過ぎ、あらためて読み返してみると、意外に面白い。特に人物描写については、ああ、こういう人、確かにいる。現代でもいるなと思うところが多い。今の言葉でいえば、実に「キャラが立っている」のだ。というわけで、これから6回にわたり、『『女の一生』キャラ図鑑』をコンセプトに主な登場人物をとりあげていきたいと思う。

初回は、当然、ヒロイン、ジャンヌである。ひとこと言えば「夢見るお馬鹿さん」。まずは、外見からいこう。

Elle semblait un portrait de Véronèse¹⁾ avec ses cheveux d'un blond luisant qu'on aurait dit avoir déteint sur sa chair, une chair d'aristocrate à peine nuancée de rose, ombrée d'un léger duvet, d'une sorte de velours pâle qu'on apercevait un peu quand le soleil la caressait. Ses yeux étaient bleus, de ce bleu opaque²⁾ qu'ont ceux des bonshommes en faïence de Hollande.

Elle avait, sur l'aile gauche de la narine, un petit grain de beauté, un autre à droite, sur le menton, où frisaient quelques poils si semblables à sa peau qu'on les distinguait à peine. Elle était grande, mûre de poitrine, ondoyante de la taille. Sa voix nette semblait

parfois trop aiguë ; mais son rire franc jetait de la joie autour d'elle. Souvent, d'un geste familier, elle portait ses deux mains à ses tempes comme pour lisser sa chevelure.

訳 彼女はヴェロネーゼの描く婦人像のようだった。きらめくようなブロンドの髪は、その肌までも輝かせる。わずかにばら色がかかった貴族的な肌は、陽光にあたると、白いビロードのような産毛がうっすらと浮かび上がり、ほかしがかったように見える。瞳の色は青。オランダの陶器人形を思わせる濃いブルーだ。

左の小鼻に小さなほくろがある。もうひとつ、顎の右側にもほくろがあって、そこからわずかに縮れた毛が生えているのだが、肌と同じ色なのでほとんど目立たない。背が高く、胸も大きく、腰の線はくびれていた。明瞭な声の響きは、ときに甲高く聞こえることもあったが、その朗らかな笑い声は、まわりの人々をも幸せにするものだった。くせなのだろう、髪をなでつけるかのように、何度も両手をこめかみにもっていく。

注 1) パオロ・ヴェロネーゼ Paolo Veronese (1528-1588) イタリアルネサンス期ヴェネツィア派の画家。2) *bleu opaque* 「不透明な青」。だが、日本語の場合「透き通るような青」は美しく、「不透明」=「濁っている、不純」という語感がある。そこで「濃いブルー」とした。

女性からすれば、何もほくろの毛まで描写しなくても、というところだが、そこまで描くのがまさにモーパッサン。ハイビジョン並みの観察力、描写力である。ジャンヌは修道院を出たばかり。今でいえば、バイト禁止、男女交際禁止の中高一貫お嬢さま学校を卒業し、これからはボーイフレンドも欲しい、いつかは幸せな結婚を、というあたりだろうか。

L'amour ! Il l'emplissait depuis deux années de l'anxiété croissante de son approche. Maintenant elle était libre d'aimer ; elle n'avait plus qu'à le rencontrer, lui !

Comment serait-il ? Elle ne le savait pas³⁾ au juste et ne se le demandait même pas. Il serait lui, voilà tout⁴⁾.

Elle savait seulement qu'elle l'adorerait de toute son âme et qu'il la chérirait de toute sa force. Ils se promèneraient par les soirs pareils à celui-ci, sous la cendre lumineuse qui tombait des étoiles. Ils iraient, les mains dans les mains, serrés l'un contre l'autre, entendant battre leurs cœurs, sentant la chaleur de leurs épaules, mêlant leur amour à la simplicité suave des nuits d'été, tellement unis qu'ils pénétreraient aisément, par la seule puissance de leur tendresse, jusqu'à leurs plus secrètes pensées.

Et cela continuerait indéfiniment, dans la sérénité d'une affection indescriptible.

訳 恋！この二年間、恋に落ちたらどうしよう、と考えては、不安を感じていた。その不安は徐々に大きくなっていった。だが、今はもう、恋をするのも自由なのだ。そう、あとは運命のひとに出会うのを待つだけ。

どんな人なのかしら。それが誰なのかはわからない。それを不思議に思ったことすらない。その人は、そう、その人としか言いようがない。

わかっているのは、自分が魂のすべてをその方に捧げ、愛するという。そして、相手も力の限り、自分を愛してくれるということ。今日のような晩に、その人と二人で散策を楽しむ。星の光が細かい灰のように降り注ぐなかを歩く。手をつなぎ、身を寄せ合って互いの鼓動を聞き、たがいの肩の温かみを感じながら歩く。二人の愛は、夏の夜の甘くさわやかな空気に溶け込んでいく。やさしく思いやるだけで、互いの思っていることが細やかな部分まですべて分かりあえるほど、二人はつよく結びついているのだ。

そして、ふたりの結びつきは清廉な愛を深めながら一生続くのだ。

注 3) *connaître* ではなく、*savoir* である点に注目。「彼を知らない（面識がない）」のではなく、「彼がどんな人なのか分からない（= Elle ne savait pas comment il serait.）」4) *le, lui* という形で「運命のひと」が^{はの}仄めかされている。

恋に恋するだけでジャンヌは幸せだった。両親とともにルーアン Rouen からイポール Yport の近くにあるレ・ブールルの屋敷にやってきたジャンヌは、海辺を散歩したり、海水浴に興じたり、ノルマンディーの豊かな自然を満喫する。感受性の強いジャンヌは、自室の窓から日の出を眺め、それだけのことに涙するのだった。

Et Jeanne se sentait devenir folle de bonheur. Une joie délirante, un attendrissement infini devant la splendeur des choses noya son cœur qui défaillait. C'était son soleil ! son aurore ! le commencement de sa vie ! le lever de ses espérances⁵⁾ ! Elle tendit les bras vers l'espace rayonnant, avec une envie d'embrasser le soleil ; elle voulait parler, crier quelque chose de divin comme cette éclosion du jour⁶⁾ ; mais elle demeurait paralysée dans un enthousiasme impuissant. Alors, posant son front dans ses mains, elle sentit ses yeux pleins de larmes ; et elle pleura délicieusement.

訳 ジャンヌは、頭がおかしくなりそうなほど幸福だった。美しい世界を前に、狂気じみた歓喜と限りない感動で胸がいっぱいになり、うっとりとしてしまう。この太陽は私のもの。この夜明けは私のもの。人生が今はじまる。希望に満ちた人生がはじ

まる。ジャンヌは太陽を抱きしめたくなくて、光のほうに手を伸ばした。そして、この夜明けにふさわしい、何か神聖な言葉を口にしようとする。叫ぼうとする。だが、ただ気を高ぶらせたまま、力を失い、動けなくなってしまった。仕方なく両手のなかに顔を伏せると、目から涙があふれてきた。ジャンヌは幸福な涙を流した。

注 5) 「!」(point d'exclamation) の連続が、ジャンヌの興奮を表している。古典=堅苦しいという先入観を覆す激しさである。6) モーパッサンの文章では比喩表現が頻出する。これをすべて「~のような」と訳しては日本語として読みにくくなるので工夫。

微笑ましいまでの少女の夢想。幸福の予感。時は5月。ノルマンディーは緑あふれる美しい季節だ。海や空の美しい風景描写が続き、読んでいる者も思わずうっとりしてしまう。やがて、ジャンヌはジュリアンという美しい青年に出会い、恋に落ちる。いや、それが恋なのかどうかすら分からないまま、あつという間に結婚してしまうのだ。美しい季節が永遠につづくわけではない。いざ、結婚してみるとジャンヌは現実に直面する。いくらお馬鹿さんのお嬢さまとて、いつまでも夢の中にはいられないのである。

訳題の功罪 (I)

学生時代、この小説を嫌いだった理由のひとつにこのタイトルがある。いや、正確には訳題である。『女の一生』というタイトルから連想される、女性蔑視の感情（女って馬鹿だなあ）、もしくは演歌調、浪花節的な古い女性像（夫や息子に尽くし捨てられる不幸な女！）が嫌だったのだ。だが、やがて、原題は実にあっさり *Une vie* であることを知る。しかも、副題には *Humble vérité* とある。ここであらためて、モーパッサンはただ、あるがままの人間の姿、たとえ残酷でも、つまらないもので、真実の姿を描こうとしたことに気づく。彼が描こうとしたのは、ごく普通の人間が抱える現実の重さ、そして、すべての人間がもつ弱さや愚かさなのだ。



ギイ・ド・モーパッサン
(1850-1893)

ちなみに、『女の一生』という邦題は、大正2年、広津和郎が英訳版 *A woman's life* を翻訳したことに端を発する。もし、英訳者が現代に忠実に *A life* という題をつけていたら、もし、英語からの重訳ではなく、フランス語から直接日本語に訳されていたら、『女の一生』は今と異なるタイトルで日本に紹介されていたのかもしれない。

※ 原文は *Une vie*, Le Livre de Poche 版から引用。

※ 訳文は拙訳『女の一生』(光文社古典新訳文庫)を使用。

(ながた・ちな)